

事業の進行状況

	検討会	消毒剤実証	バイオ炭	地域づくり事例集	新たなビジネス潮流	関係者の集い	国際昆虫学会議展示	技術指導者派遣
4月								
5月	委員依頼				ヒヤリング対象者(講演者)の検討		展示構想検討	技術アドバイザーの登録(8日)
6月	委員委嘱(3日)	第1回WG(12日)	桑条採取・乾燥	事例集の企画				
7月	第1回検討会(17日)				第1回WG(11日)			
8月		現地実証	研究所で試験を実施することについて阿見町廃棄物対策課との協議	原稿依頼	ヒヤリング(講演会:23日)		国際会議場展示(25日~30日)	
9月								
10月					第2回WG(8日)	集いの開催構想の検討		
11月	第2回検討会(8日)	第2回WG(27日)	炭化試験	校正・編集				
12月		マニュアル作成	桑条採取・乾燥	現地調査				
1月		研修会		事例集印刷	ヒヤリング(講演会:27日)			
2月		第3回WG	炭化試験		第3回WG(5日)	国産生糸展示・商談会(20日、21日)		
3月	第3回検討会							

新たな混合薬剤による蚕室消毒方法の実証と研修

1. 実証試験の実施

塩化ジデシルジメチルアンモニウム (DDAC) と消石灰の混合液 (DDAC 消石灰液) による“発泡消毒”の実証試験を3戸の養蚕農家で実施した。

実施日	場 所	担 当 者	出 席 者
8月20日	栃木県小山市 (五十畑氏宅)	須藤日出夫 鈴木秀一 野澤瑞佳	五十畑夫妻・JA おやま養蚕部会 (10名) JA おやま企画課 (1名) 栃木県下都賀農業振興事務所 (1名) 小山市農政課 (1名) 下野市農政課 (1名) 群馬県蚕糸技術センター (2名)
8月29日	埼玉県所沢市 (小暮氏宅)	甲賀真人 野澤瑞佳	小暮夫妻・埼玉県内養蚕農家 (5名) 合同シルクラボ松本 (1名) JA いるま野 (1名) JA ちちぶ (1名) JA 埼玉ひびきの (1名) 埼玉県優良繭生産推進協議会 (1名)
9月4日	栃木県那須塩原市 (佐々木宅)	屋代匡史 野澤瑞佳	佐々木夫妻・JA なすの養蚕部会 (8名) JA なす南養蚕部会 (3名) JA なす南農畜産課 (1名) 群馬県蚕糸技術センター (2名) 蚕糸科学技術研究所 (1名) 大日本蚕糸会 (1名)



2. 今後の予定

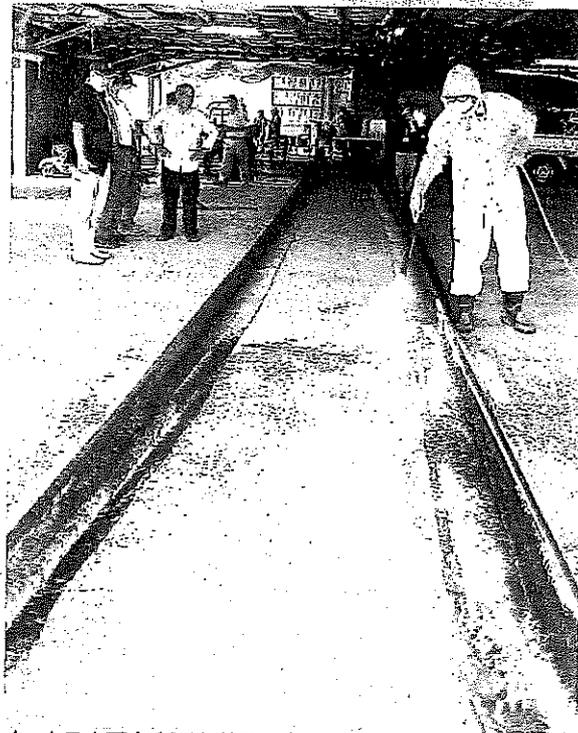
第2回 WG 検討会 (11月27日) を開催し、次の項目を検討する。

- ・ 実用蚕品種に及ぼす新消毒剤の影響評価 (群馬県オリジナル蚕品種・繰糸成績等)
- ・ 実証試験終了後の戸別養蚕成績
- ・ 消毒剤の使用マニュアル作成と印刷
- ・ 研修会の開催候補地 (6か所)

(第3種郵便物認可)

新たな蚕室消毒剤散布

低コストで保存しやすい



大日本蚕糸会蚕糸科学研究所の野澤研究員による実演散布(栃木県小山市で)

【栃木・おやま】JAおやま、県、小山市、下野市で構成する県小山市地区養蚕産地育成協議会は8月中旬、国内初となる新たな蚕室消毒剤の散布実証試験を実施した。水100リットルに消石灰(アルカリ70%)500リットルと塩化ジデシルジメチルアンモニウム(DDAC)を0.2%加え、混合した液を蚕室などの飼育施設内に散布した。今回の実証試験で作柄が良好であれば普及に移す。

散布試験は同市の養蚕農家で開き、JAおやま養蚕部会や関係者ら17人が参加。新たな消毒剤の作り方や散布方法を学んだ。養蚕業は、従事者の高齢化とともに年々減少傾向にあり、効率的な低コスト養蚕経営と安定した生産基盤の確保に取り組む必要がある。そこで、大日本蚕糸会蚕糸科学技術研究所(茨城県阿見町)は、蚕に甚大な被害を及ぼす膿病の原因ウイルスや細菌・糸状菌などにも有効な、低コストで保存もしやすい消毒剤として、今まで使用していたDDACを加えるだけの新たな混合消毒剤を実

栃木県小山地区協 産地育成 効率化へ実証試験

用化した。核多角体病ウイルスが原因で発生する膿病は、繭の生産で深刻な被害を引き起こす。このウイルスに感染した蚕は、病気が進むにつれて白い体液を出しながら死する。病気の蚕が桑葉を徘徊(はいかい)することで健康な蚕にも病気がまん延し、著しい減産につながる。実証実験では、同研究所の野澤瑞佳主任研究員が、発泡ノズルを装着した動力噴霧機を使い、約400平方メートルの蚕室内(床と側面)に200リットルの混合液を20分かけて実演散布した。生産者からは「消毒する際の順番はどのようにするのが有効か」「蚕具類も消毒した方がよいのか」など多くの質問が寄せられた。

桑剪定枝のバイオ炭化試験

養蚕における温室効果ガス削減のため桑剪定枝のバイオ炭化の試験を行う。

果樹で既に実施されている剪定枝のバイオ炭化方法について、桑の剪定枝への適用可能性を検討するための試験を実施する。

(2) 山梨県における4パーミル・イニシアチブの取組

○試験研究

炭化の方法、炭素貯留量、土壌改良効果、生育への影響 等

○現地検証

実用段階での課題把握、地域への普及加速化

○ブランド化

認証制度創設、新たな付加価値によるブランド化

農林水産省の交付金「グリーンな栽培体系への転換サポート」も活用し、取組を推進。



* 1世界の土壌の表層の炭素量を年間0.4% (4パーミル) 増加させれば、人間の経済活動によって増加する大気中の二酸化炭素を実質ゼロにすることができるという考え方に基づく国際的な取組 (4パーミル・イニシアチブ) が、2015年、パリ協定と同時に発足。2020年、日本の都道府県で初めて山梨県が参加。

<取組経過>

○5月11日 モキ製作所を訪問し炭化器を視察。





- 5月28日 阿見町農業振興課に説明。
- 6月27日 阿見町廃棄物対策課に説明。県に相談するように指示。
- 8月20日 茨城県廃棄物規制対策課に問合せたところ市町村の権限との見解。
- 9月11日 阿見町廃棄物対策課に県の見解を説明。弁護士に相談の上回答。
- 10月8日 阿見町廃棄物対策課長から無煙炭化器の使用は認められない旨回答。

～阿見町外で試験を実施することを検討中～

9 バイオ炭製造時の注意点 - 廃棄物処理法 -

- 地域におけるバイオマスを活用し、バイオ炭を製造しようとする場合は、廃棄物処理法上の適用を受けることがあり、同法に基づく適切な取扱いをする必要があります。
- 廃棄物に該当するか等の判断は、個別の事案に応じて、自治体が判断するため、事前に自治体の関係部局と十分に協議した上で取り組む必要があります。

■ バイオ炭を製造する上で廃棄物処理法の焼却の禁止に係る規定（法第16条の2）に違反しないために注意するポイント



■ 原料は廃棄物か否か

自治体がバイオ炭の原料を廃棄物とするか否かは、5つの要素を総合的に考慮して判断される。

①物の性状	②排出の状況	③通常の取扱い形態	④取引価値の有無	⑤占有者の意思
・利用用途に合った品質か ・飛散、流出、悪臭等がないか	・需要に沿った計画的な排出か ・適切な保管、品質管理がなされているか	・製品としての市場があり、廃棄物として処理されている事例がないか	・取引の相手方に有償譲渡されているかつ当該取引に経済的合理性があるか	・占有者の意思として適切に利用、又は他人に有償譲渡する意思が認められること

■ 製造工程は熱分解か否か

焼却を伴わずに加熱により分解するのであれば、廃棄物処理法上の焼却ではなく熱分解の処理に当たるが、簡易式炭化器の場合は、熱分解だけでなく焼却も伴うため焼却と判断される可能性が高い。

■ 焼却の禁止の例外に該当するか否か

簡易式炭化器の使用等による焼却を伴うバイオ炭製造の場合、自治体が焼却の禁止の例外（廃棄物処理法第16条の2第3号）に当たると判断するには、以下の点を勘案するため、炭化方法や実施場所等は、自治体の関係部局と十分に協議する必要がある。

- I 公益上もしくは社会の慣習上やむを得ない廃棄物の焼却に該当するか
- II 周辺地域の生活環境に与える影響が軽微である廃棄物の焼却に該当するか

蚕糸業を核とした地域づくりの事例集の作成

1. 趣旨

養蚕業は我が国文化のバックボーンとして、全国各地の生活や風土の中に根付いていることが多い。近年、かつてシルク産業が盛んであった市町村が中心となって「シルクのまちづくり市区町村協議会」が設立され、まちづくりの核として蚕糸業を活用するとともに、市町村が独自に養蚕に対して支援する例が見られる。同協議会の構成市区町村やその他の市町村の先進事例を収集・整理し、情報発信することにより、蚕糸業を核としたまちづくり及び養蚕への支援の機運を醸成する。

2. 執筆依頼

検討会の議論も踏まえ、シルクのまちづくり市区町村協議会の構成員（33 地区）及び構成員にはなっていないが養蚕やシルクを核として地域づくりに取り組んでいる市町村、県（愛知県豊田市、岩手県北上市、福岡県大野城市、東京都八王子市、埼玉県本庄市、群馬県）に執筆依頼（8月末から9月初め）。

<執筆依頼項目>

- （1）取組の背景・経緯
- （2）取組の効果
- （3）今後の課題
- （4）活用した補助事業等

3. 原稿の提出状況

現在 6 事例について原稿の提出。未提出の市町村等について個別に依頼中。

県	市区町村	原稿提出状況
岩手県	北上市	×
山形県	鶴岡市	
	長井市	
	白鷹町	○
福島県	川俣町	
茨城県	結城市	
栃木県	足利市	
	小山市	
群馬県		○

	富岡市	△
	前橋市	×
埼玉県	本庄市	○
東京都	新宿区	
	武蔵村山市	
	八王子市	○
新潟県	十日町市	
	小千谷市	
	南魚沼市	
石川県	金沢市	
	小松市	
福井県	勝山市	
山梨県	富士吉田市	
	西桂町	△
長野県	岡谷市	
	駒ヶ根市	
	安曇野市	
愛知県	豊田市	×
滋賀県	長浜市	
京都府	京都市	×
	宮津市	×
	京丹後市	○
	与謝野町	
兵庫県	養父市	×
愛媛県	西予市	
福岡県	大野城市	○
鹿児島県	鹿児島市	
	奄美市	
	龍郷町	
沖縄県	久米島町	

新たなビジネス潮流 WG の検討状況

1. 趣旨

全国シルクビジネス協議会の協力を得て、以下の委員で構成するWGを開催し、新たなビジネス潮流について意見交換し、情報発信する。

2. WG委員

河合崇	ユナイテッドシルク（株）代表取締役社長
鳥越昌三	東洋紡糸工業（株） 取締役開発部長
亀田恒徳	農研機構生物機能利用研究部門新素材開発グループ長
冨田秀一郎	農研機構生物機能利用研究部門カイコ基盤技術開発グループ長
中澤靖元	東京農工大学大学院工学府生命工学専攻教授
齊藤昭紀	群馬県農政部蚕糸特産課地域特産主監
四方田正美	群馬県蚕糸技術センター所長

3. WG開催

令和6年7月11日 第1回WG

- ・国産繭の付加価値向上の可能性

令和6年10月8日 第2回WG

- ・国産繭の付加価値向上の可能性

(予定)

令和7年2月5日 第3回WG

- ・繊維以外用途の需要見込み
- ・遺伝子組換えカイコの活用展望

4. 有識者ヒヤリング

(1) 海外有識者 Silvia Cappelozza 博士

○テーマ：「欧州シルクルートの復活プロジェクトについて」(仮)

○日時：8月23日(金) 14:00～16:00

○場所：大日本蚕糸会会議室 (オンライン併用)

(予定)

(2) 国内有識者 株式会社羽田未来総合研究所 社長 大西 洋氏

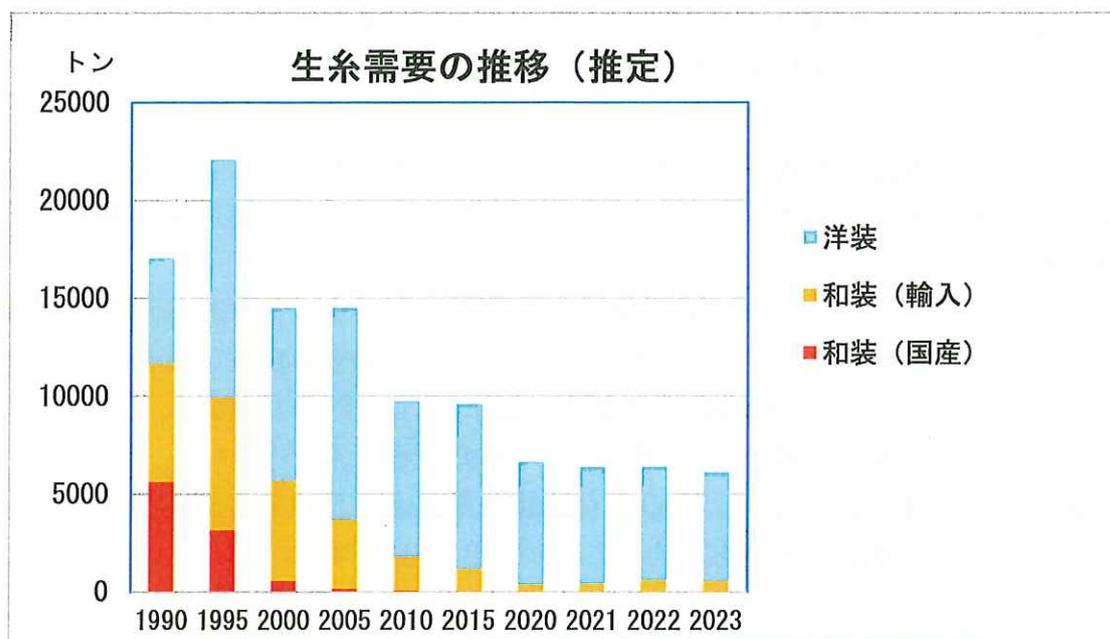
○テーマ：「未定」(日本発の地方創生型ラグジュアリーブランドを羽田空港から世界への取組に関する講演)

○日時：1月28日(月) 14:00～16:00

第2回新たなビジネス潮流 WG までの議論のまとめ

1. 我が国の生糸需要と国産繭の販売環境

○2023 年における我が国の生糸需要は、6,060 トンと推計され、世界の生糸生産量（8 万トン強）の 7～8%を占める市場となっている。その内訳は、洋装需要が 9 割程度、和装需要は 1 割程度とみられる。



○国産繭・生糸の流通のほとんどを占める蚕糸・絹業提携グループを通じた流通においては、川下業者の多くが和装業者であることから、和装需要が大部分を占めている。提携グループは、国産生糸の高い販売価格を実現し、これを各生産段階に還元することを旨として設立されたものの、輸入生糸との競争や和装需要の減退などもあって、製糸原料としての繭については養蚕農家が再生産できるような価格の実現には至っていない。

○一方、国産の繭に価値を見いだす企業・工芸作家や繊維以外の医薬品、化粧品、食料品等の需要に向けたビジネス展開を目指す企業が出現しており、国産繭の供給可能な養蚕農家を探す動きがみられる。

2. 国産繭の付加価値向上への挑戦

持続的な養蚕業を確立するためには、国産繭・生糸を使用した製品の高い販売価格を実現しその利益を養蚕農家に還元していく必要があります、国産繭・生糸の価値を訴求できる方策を追求していく必要があるのではないかと。

(1) 歴史・文化の活用

○我が国の養蚕は、中国の史書「魏志倭人伝」に3世紀に邪馬台国から魏に倭錦が贈られている記述があるなど、非常に古くから営まれてきており、長い歴史の中で生活文化に根付き、伊勢神宮の式年遷宮等の祭事に不可欠なものとなっている。

○養蚕・製糸業は、明治以降の我が国の近代化を支えた基幹産業であり、世界遺産富岡製糸場に代表されるように、全国各地に文化財的価値のある建物や技術が残されている。

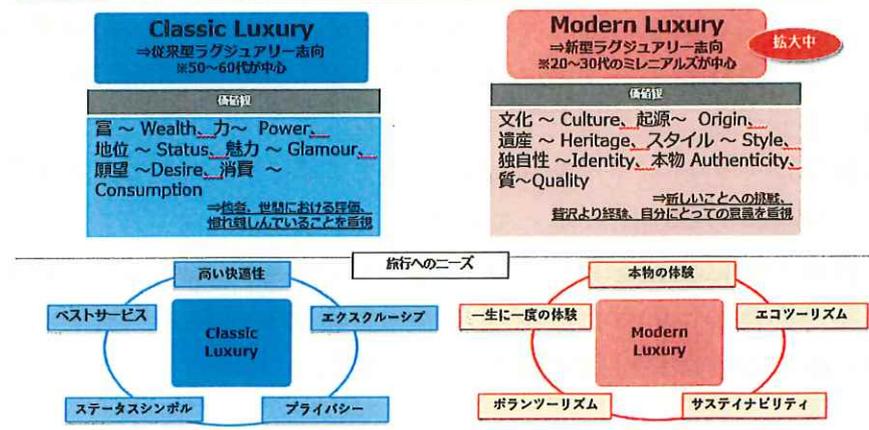
○「新たなクールジャパン戦略」(2024年6月4日内閣府知的財産戦略本部決定)で指摘されているように、“特に近年では、文化や独自性に重きを置くモダンラグジュアリーの価値観(「本物の体験」、「エコツーリズム」、「サステナビリティ」等に重きを置く。)が重視される傾向が強くなっている”。

○養蚕・製糸業においても、このような傾向を捉え、日本の養蚕の歴史や文化を背景として国産繭の価値を高めることができるのではないかと。

富裕旅行者の志向 (マインドセット)

日本の魅力と日本の未来
JNTO 日本政府観光局

「ラグジュアリー」の定義・価値観は変化・多様化しており、大きく分けるとClassic Luxury志向(従来型)とModern Luxury志向(新型)のマインドセットが存在。特にModern Luxury志向(新型)が拡大を続けている。



Japan, Entus Discovery

※富裕旅行者市場調査結果より作成。 9

(出典) 日本政府観光局Web サイト (下記) より

<https://www.jnto.go.jp/projects/regional-support/news/2129.html>

○EUでは、シルクの歴史的・文化的財産を活用したシルク産業のイノベーション・エコシステムを創出することを目的とする研究プロジェクト（ARACNE）が進行しており、そのベースとしてカイコ、桑、織物の歴史等をまとめた「ナラティブ・カタログ」を作成している。

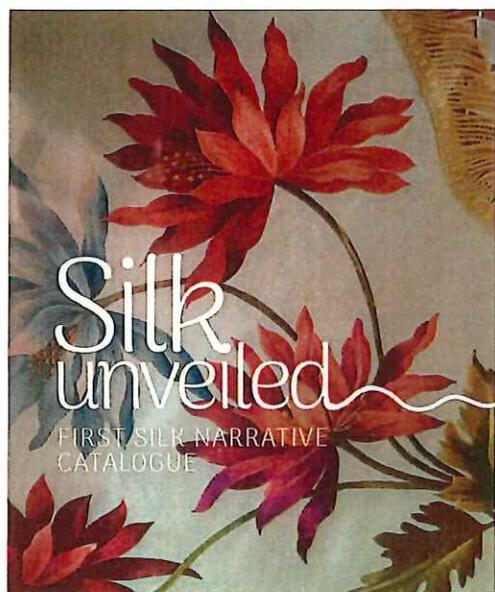


Table of Contents

<p>01 Introduction - The ARACNE Silk Road Consiglio per la Ricerca in Agricoltura e l'Analisi dell'Economia Agraria (CREA) / Silvia Cappellazzo / 5</p> <p>02 The History of Sericulture in Europe University of Fribourg / Francesca Vizzotto / 6</p> <p>03 The Traditional Rearing and Sericultural Equipment Consiglio per la Ricerca in Agricoltura e l'Analisi dell'Economia Agraria (CREA) / Silvia Cappellazzo / University of Sarajevo / Marina Bulatić / 12</p> <p>04 Mulberries - Living Monuments of Sericultural History University of Maribor / Andrija Urbašek Krnjević / 13</p>	<p>04.1 The Traditional Equipment used for Mulberry Cultivation University of Maribor / Andrija Urbašek Krnjević, Spela Jelen, Marina Bulatić / 18</p> <p>05 Outline of silk processing with brief historic notes Consiglio per la Ricerca in Agricoltura e l'Analisi dell'Economia Agraria (CREA) / Silvia Cappellazzo / Ministero Superiore di Educazione, Università (MSE) / Panomira Ezenov / 22</p> <p>06 History of Sericulture in the participating ARACNE countries ITALY / Silvia Cappellazzo / 22 BULGARIA / Panomira Ezenov / 23 GREECE / Skafistos Dodos, Donna Koplavá / 23 GEORGIA / Jilma Bagration, Salome Phidropashvili / 22 FRANCE / Evelyn Duvoux-Tisserand, Jean Pierre Marie, Delphine Tisserand, Johanny Gallée / 22 SPAIN / José María Aranda, María Sánchez Alcaraz, Salvador D. Arana-Orozcoles, Zaida Hernández Guillén, Ana Fajó in Bombard / 22 SLOVENIA / Marina Bulatić, Verica Rita Tavcar, Andrija Urbašek Krnjević / 22</p>
--	---

○我が国でも2019年に蚕糸・絹業提携グループが「26の物語で紡ぐ日本の絹」という小冊子を作成しているが、近年様々な分野で「ナラティブ」が注目されており、国産繭・生糸を使用したビジネス展開する企業等もソーシャルメディアも活用した「ナラティブ」の創造と拡散による話題性や注目度のアップを検討してみる価値はあるのではないかと。



2019年 蚕糸・絹業提携グループ全国協議会作成

(2) 洋装需要をターゲットにした新たなビジネスモデルの構築

○国内の生糸需要量の9割を占める洋装需要については、蚕糸・絹業提携グループの川下業者が和装業者中心であったことから、市場開拓が遅れているのではないかと懸念される。洋装需要をターゲットにした商品開発を進めることにより、新たな国産繭・生糸の需要を創出・拡大することができるのではないかと期待される。

○経済産業省がまとめた「2030年に向けた繊維産業の展望」では、新たなビジネスモデルを創造するため、「ファクトリーブランドやDtoC企業を多く創出する支援を進めるとともに、デジタル分野をはじめとする他分野との連携を促進」するとしており、国産繭・生糸を使用した商品企画・販売等についてもこのような新たなビジネスモデルを取り入れていく必要があるのではないかと懸念される。

戦略分野Ⅰ 新たなビジネスモデルの創造

- ファクトリーブランドやDtoC企業を多く創出する支援を進めるとともに、デジタル分野をはじめとする他分野との連携を促進。
- 事業承継等を支援することで、高い技術を次代に受け継ぐための取組を進める。

ファッション・ビジネス・フォーラムを通じた好循環の創出

- 独自ブランド等を通じた独自製品の展開により、資金上昇や人材獲得等につなげる。“好循環の創出”を作り出すことが重要。
- デザイナー、インフルエンサー、産地企業、DtoC企業、アパレル企業、他分野の企業等が結びつく場として、ファッション・ビジネス・フォーラム（仮称）を創設。

産地産地間の連携

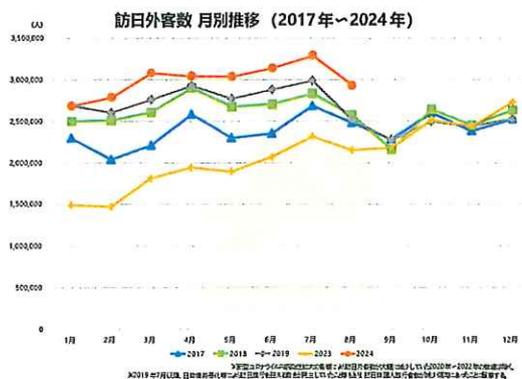
- 国内の産地には、就業者数や出荷量の減少など、共通の課題があり、そうした課題に対応した有効な取組を共有・模倣していくことが望ましい。
- 産地を有する地方公共団体により構成する「組織産地ガミット」（仮称）を創設・整備する。

事業承継等の促進

- 事業承継・引継ぎ補助会により、事業承継・引継ぎ後の設備投資や販路開拓等の経営革新に係る費用、事業引継ぎ時の専門家活用費用等を支援。
- 生産性向上を旨とした事業再編を行う取組を支援するため、産業競争力強化法により、事業再編計画として認定した取組を、税務優遇や金融支援等の支援範囲により、後押しする。

経済産業省 「2030年に向けた繊維産業の展望」概要資料より抜粋

○最近の訪日外客数が月間300万人前後と高水準で推移しており、その消費額は年間7兆円規模になるものと見込まれていることを踏まえ、訪日客（特にラグジュアリー層）をターゲットとした商品開発をしていくことが有効ではないかと懸念される。



(3) 医薬・化粧品・食品用途向け需要への対応

<次回>

(4) 国産繭・生糸の強みが発揮できる素材・技術

①特色あるカイコ品種

<次回>

②遺伝子組換え等最先端技術

<次回>

③品質評価と繊維加工技術

○国産繭の生産量が極めて少なくなっている中で、安定した品質の生糸を供給することができないという問題があり、大量生産を前提とした従来の品質評価項目で評価しても輸入生糸に勝ることはできないのではないかと。

日本の生糸は白度が優れているという評価はあるが、数値化されたものはない。ラウジネスは白度との相関は明確ではなく、むしろ強度との関連性がある。

新たな評価項目として導入する場合には、評価結果が養蚕農家の生産意欲向上に結びつくような方法で実施するべきではないかと。

○製糸や撚糸の工程で国産生糸の品質のばらつき等の弱みをカバーするとともに、他の繊維との混紡やウォッシュャブル機能の付与等により付加価値を高めることができるのではないかと。

④トレーサビリティ

○近年、欧州においてサステナビリティや人権デュー・ディリジェンスが重視されてきており、グローバル企業では責任ある原料調達が求められている。特に、欧米への輸出を狙って商品開発を行う場合には、日本の繭・生糸の産地や生産方法の記録を整備（可能であればデジタル・データとして保存）しておくことが必要ではないかと。

⑤安全性・環境保全・経済安全保障

○食料生産については、消費者から安全性や安心感が強く求められていることから、GAP や有機栽培の認証の取組が進んでいる。養蚕についても、特に食品用向けでは、同様の取組を進めることが国産繭の競争力強化につながるのではないかと。

○桑条のバイオ炭化が温室効果ガス排出削減に有効と実証されれば、それに取り組んでいることをアピールすることにより、国産繭の訴求力を高めることが

できるのではないか。

○シルクは、原料生産から製品まで自国で生産できる繊維素材として、経済安全保障の観点から今後注目すべきではないか。

3. 推進方策

○和文化に関連した産業と連携した情報発信

○多様な地域資源を活用して付加価値を創出する農林水産省や観光庁の補助事業の活用

○伝統的工芸品産業の振興との連携

○表示制度の活用

その他の事項

1. 国際昆虫学会議での展示（8月25日～30日）

○日本蚕糸学会、農研機構、NBRP（九州大学）、大日本蚕糸会の共同展示

○展示物：

- | | |
|--------|---|
| 大日本蚕糸会 | 西陣織物館所蔵「能装束 1領」
繭 3000粒（きもの1反分）
伊と幸（姫+使用のニット製品）
ポスター1枚 |
| 農研機構 | 光る繭
絹紬使用の三味線
ポスター2枚 |
| 日本野蚕学会 | ポスター1枚 |
| NBRP | 動態展示 カイコ
冊子
ポスター2枚 |

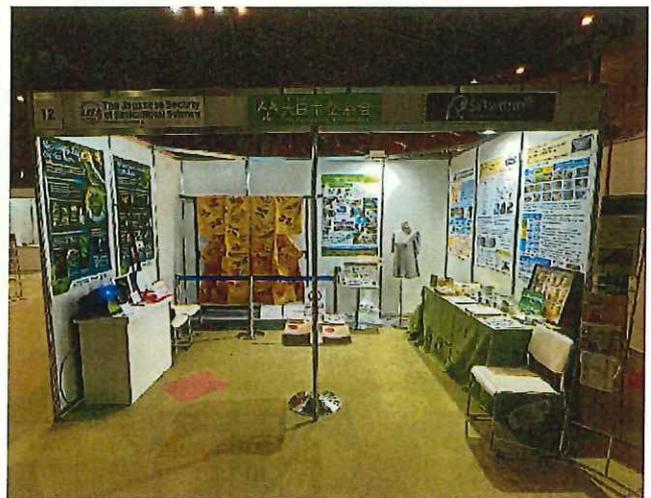
○配布物；

- | | |
|--------|--|
| 大日本蚕糸会 | 要覧（日本語版 200、英語版 300）
26の物語（新版 800）
伊と幸姫+（日本語版 200、英語版 200） |
|--------|--|

西陣織物館所蔵「山口伊太郎作」能装束



ブース全景



来場風景



伊と幸



2. 蚕糸関係者の集い

蚕糸関係者が集まる既存のイベントもあることから、今回は下記のように国産生糸に焦点を当て、製糸業者と工芸作家等とのマッチングの機会を提供することとする。

国産生糸展示会・商談会の企画（案）

1. 趣旨

国産繭・生糸の良さを理解してもらい、付加価値のある製品づくりのきっかけを提供する。

2. イベント概要

(1) 展示

国産繭で生糸を製造している製糸会社（碓氷製糸（株）、松岡（株）、宮坂製糸所、西予市野村シルク博物館）の特色ある生糸を展示。

(2) 来場者

- 国産生糸を使用して商品を企画・制作する工芸作家、アパレル企業等
- 服飾系大学・専門学校学生・OB

(3) サイドイベント

- 映画上映「シルク^{とき}時空を超えて」（上映時間約90分）

*明治以降の日本の蚕糸業の歴史について理解を深めていただき、付加価値のある作品づくりにつなげていただくことをねらいとする。

3. 場所

ジャパンシルクセンター：展示

蚕糸会館会議室：映画上映及び商談

4. 開催日時

令和7年2月20日（木）12:00～16:00

21日（金）11:00～16:00

（*両日とも映画上映：12:00～14:00）

3. 技術アドバイザー

○技術アドバイザーの役割

地域の養蚕指導者が減少している中で産地の技術指導体制を補完するため、蚕糸科学技術研究所の職員を技術アドバイザーとして養蚕農家等に派遣し、課題を把握するとともに可能な対応策を助言する。

○登録技術アドバイザー（5月8日常勤理事会決定）

氏名	役職	専門分野
持田裕司	上席研究員	養蚕（R6.8月頃～）
池嶋智美	主任研究員	養蚕（～R6.8月頃）
竹村洋子	主任研究員	養蚕（～R6.8月頃）
野澤瑞佳	主任研究員	蚕病
松川 武	主任技師	桑栽培
赤井雅志	技師	桑栽培

○派遣実績

派遣日	派遣場所	助言内容等	技術アドバイザー
9月18日 ～19日	山形県最上町	蚕室消毒の助言 桑の萎縮病の確認	野澤瑞佳
9月30日	栃木県小山市	膿病対策の助言 晩々秋蚕の配蚕直後の膿病の確認	野澤瑞佳
10月2日	千葉県香取市	膿病対策の助言 晩々秋蚕の配蚕直後の膿病の確認	野澤瑞佳

蚕糸をめぐる情勢と今年度の事業計画等に関する委員意見

(芦澤委員)

○桑枝炭化について

温室効果ガス減少を実現している桑栽培・飼育方法で生産した繭を高単価で販売するための道筋として、取り組み事例の山梨ではブランド化等を実施しているがなかなか生産者に還元できる結果になっていないように思う。この取り組みは、「オーガニックシルクの取り組みに加える。」や、「海外展開の際に+αで訴えかけるポイント。」のように思う。また生産者地域内で同じ志の他分野の事業者とイベントを通し進め、地域の中で養蚕農家がローカルにつながる形を形成するきっかけになると思う。

○養蚕業を核とした地域の事例

地域の視点で養蚕を残す方向性は今後必要と思うので、実施してもらいたい。この事例集が誰にとって有益になるかと考えると、自治体職員よりも、事業者や金融機関や大学や学生や民間団体など実際に活動する本人たちなのかもしれない。印刷物を発行して終わりにするより、もう少し踏み込んでセミナーをすとか地域活性のシンポジウムで講演するとかするとさらにニーズを得られるのではないかと思う。

○新たな潮流の WG

とても良い取り組みと思う、蚕の可能性を広がることは嬉しい。最初はニーズを探るところだとは思いますが、生産規模をどう担うかは難しいと思う。

○ARACNE

イメージがあまりわからないが、日本のシルクが欧州で活発に活用されるとしたら嬉しいことだと思う。ただ、商流や価格をしっかりと確保したいと思う。どこを通して売るのがか？

世界的にシルクの生産量が減っている中、国内の生産分の分配をしいのか？

価格の面も競争価格ではなく、飛び抜けた価格で生産側の基盤を安定してほしい。

新しい商流を作るのも良いと思う。

(工藤委員)

消費者が、これから繭、シルク製品を購入し利用していくのかは大切なところです。伝統品や伝統工法の衰退、後継者の減少はあらゆる産業にも起きていることです。消費者は、使いたくても市場で手に入らなければ、安価な代用品

を求めてきました。

消費者の「国産繭、国産製品を使いたい、欲しい」をより喚起して、できるだけ購入しやすいような流れがあればよいと思います。

絹や絹製品を使った経験（手に取る、身に着ける＊化粧品などもあります）を、若いうちにできるだけ増やせないでしょうか。「和服」へ到達する前に、身近なもの（袋物、マフラー、手袋、ポーチなど）として普段使いできれば良いと思います。

（佐藤委員）

めぐる事情「7 蚕糸、絹業の特徴」のうち、川上のスタートがいきなり「養蚕農家」になっていますが、「養蚕農家」がスタートでしょうか。ここに至る部分が意識されていないと思います。

つまり、蚕種製造、催青、稚蚕飼育、桑苗、飼育資材・消毒資材などの入手の大切さが表現されていないのではないのでしょうか。

資料 2-1「養蚕業をめぐる課題の抽出」で論じられたことをここに落とし込めないのでしょうか。（このまま見ると、資料 2-1 で抽出された課題はあるものの、輸入繭を使えば特に問題ないと解釈できます。）

（土屋委員）

蚕糸業をめぐる情勢については、松島会頭の挨拶にあった「危機感」を関係者で共有しなければならないと思います。昨年、碓氷製糸の繭収納量は 30 t まで落ち込んでおり、これ以上割り込んだら廃業せざるを得ない状況に陥ることが懸念されます。

現在、我が国の蚕糸業は、蚕種、養蚕、製糸の全ての業種が赤字であり、補助金を頼りに細々と生きながらえています。この打開に向けては、大日本蚕糸会が中心となって川上から川下までの連携グループの形成に取り組んできていただきましたが、残念なことに未だ蚕糸業界は好転していないと言わざるを得ない現状です。

特に、上繭は、大日本蚕糸会・養蚕コストの動向分析にあるように生産費は 3,875 円/Kg であり、繭単価との差額をいずれかの方法で埋めないことには生産者の意欲向上は絶対に図れません。長期的に繭価格を維持できる新たな仕組みを構築し、養蚕農家の規模拡大、養蚕への若者や企業等の参入を促進できたらと思います。

厳しい状況下の一方で、「富岡製糸場と絹産業遺産群」は世界遺産登録 10 周年を迎え、創設者の一人である渋沢栄一翁が 1 万円札の肖像となるなど、絹産業にとって明るい話題もあります。全国民に対し、我が国の近代化を支えた絹

産業は、今でも日本国内に息づいていることを広く周知し、我が国絹産業の象徴である世界遺産とともに未来へと結びたいと願っています。

この度の検討会の中では、個別の事業のみならず、日本の蚕種、養蚕、製糸関係者はもとより、国、県、及び、大日本蚕糸会が一丸となって、世界に誇るべき我が国の蚕糸業を未来に向けて堅持する体制を構築できるよう具体的、かつ大胆な議論がなされることを期待しています。

次に、今年度の事業計画については、それぞれ期待をしていますが、「新たなビジネス潮流」については、改めて生糸やシルクを素材として活用する新たな企業の発掘に取り組んでいただきたいと思います。また、取り組みを希望する企業とは産官学による連携事業として国、県、及び、大日本蚕糸会が一丸となって新たな絹製品開発、更には販路拡大への支援がされることを期待します。